

# キリストは教会を愛された

ウィリアム・マクドナルド

ゴスペルフォリオプレスジャパン

This book was first published in the United States  
by Emmaus Correspondence School(A division of ECS Ministries),  
PO Box 1028  
Dubuque,IA 52004-1028  
with the title CHRIST LOVED THE CHURCH,  
copyright©1956,1971,2005 by ECS Ministries.  
Translated by permission.

学ばれる方々へ

「教会」というと、使徒時代の一世紀後に発展しはじめ、ローマ皇帝コンスタンティヌスの下でローマ帝国の国教になり、現代では、ローマカトリック教会、ギリシア正教会、数々の国教会や、また、国教会に属さない法人化された諸団体によって代表される巨大に組織化された宗教システムを想像する傾向があります。しかし、それが新約聖書でいう「教会」でしょうか。神は、教会をどのようなものとして見ておられるのでしょうか。それは、当初どのようなものだったのでしょうか。また、今日、どのようなものであるべきでしょうか。

この講座では、最高権威である聖書が、その主題についてなんと語っているかを学びます。ある方々にとっては、この講座で述べられている事柄は、耳新しくて画期的でしょう。また別な方々は、すでに長く慣れ親しんでいるやり方や様式について、改めて学ぶことになるでしょう。しかし、誰もが権威ある「主はこう仰せられる」に何度も直面することによってチャレンジを受けましょう。この学びが、あなたにとって祝福となりますように。

# あなたが学ぶことになるレッスン

第1章	キリストのからだである教会	8
第2章	教会に関する偉大な真理	16
第3章	地域教会	24
第4章	かしらなるキリスト	34
第5章	教会における聖霊	44
第6章	教会における規律	52
第7章	教会の拡大	60
第8章	神によって定められた(1) 万人祭司とバプテスマ	70
第9章	神によって定められた(2) 聖餐式と祈り会	84
第10章	監督(長老)たち	96

第11章	仕える者たち	108
第12章	教会におけるそれぞれの立場	122
巻末	試験問題	135

## 第1章 キリストのからだである教会

「…キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように…」(エペソ5・25)。私たちもまた教会を愛し、教会のために自分をささげましょう。地上の教会が前進し繁栄し勝利するために、私たちは、愛と喜びをもった奉仕へと、自分自身を犠牲的に、また、献身的にささげたいものです。

この学びの目的は、「キリストのからだなる教会」の性格と行動を定めている新約聖書の重要な原則のいくつかを学ぶことです。まず、普遍的教会(訳者注―普遍的教会とは、イエス・キリストの十字架の贖いのみわざによって救われた、世界中のあらゆる時代の信者によって形成されている目に見えない教会のこと)に関する偉大な変わらない真理をもう一度調べて、それから、各地域教会がどのようにして生活と実践を通して、それらの真理をあかししていったら良いかを見ることにしましょう。

この学びの最初に、一つの非常に重要なポイントを強調したいと思います。ある教会やあるクリスチャンは、自分たちが聖書で教えられている地域教会に関する様式や型に従っていることを非常に誇っています。彼らは、教会のリーダーやメンバーの実際の霊的状态とは関係なく、それらの形に従っています。もちろん、言葉ではそのように言いませんが、彼らにとってはそのメンバーの従順と熱意以上に、教会内で正しい聖書教理と形を保つことの方が重要なのです。私たちは、教理と実践の両方が同じだけ重要

であると断言します。地域教会を構成するキリスト者は、常にその態度と行動によって、彼らが実践している教会に関する教理の良い「広告」、あるいは、「見本で」なければなりません。「いつでも常に正しい教会」のメンバーの間に、不和、うぬぼれ、冷たさがあるなら、いったい何の意味があるでしょう。このことは、この学びで一貫して強調されます。

それでは、普遍的教会について調べるにあたって、まずそれを定義づけ、描写することから始めましょう。

### 教会の定義

新約聖書の教会(church)という言葉は、「呼び出された者たち」「集まり」、あるいは、「集会」という意味のギリシア語エクレシア(ekklesia)の訳語です。ステパノは、イスラエルの民を「荒野の集会」(使徒7・38)と表現する際この言葉を使用しました。この言葉は、使徒の働きでエペソでの異教徒の群衆を描写するのにも用いられています(使徒19・32、39、41)。

しかし、新約聖書におけるこの言葉の最も一般的な用法は、主イエス・キリストにある信者の群れを描写することです。たとえば、パウロは、「神がご自身の血をもって買い取られた神の教会」というときにこの言葉を使用しました(使徒20・28)。コリントのキリスト者への第一の手紙で、この偉大な使徒は全世界を三つのグループに分けました。すなわち、ユダヤ人、異邦人、および神の教会です(1コリント

10・32)。さらに、彼は神の教会を、自分が回心する前に迫害したキリスト者を含むものと見ています（1コリント15・9）。

教会は、組織ではなく、有機体であるとしばしば言われてきました (not an organization but an organism)。その意味は、教会は生命のない制度ではなく、生きた統一体であるということです。それは、キリストのいのちを共有し、聖霊による生ける一致によって互いに結び合わされているすべての者たちの交わりです。それは、「制度化した性格を持たない純粋な交わり」と的確に表現されてきました。

新約聖書では、多くの描写的な呼び名が教会に与えられています。教会を理解する上で最も良い方法の一つは、それぞれの呼び名の意味についてじっくり考えることです。以下が、教会に関する代表的な描写です。

1 一つの群れ（ヨハネ10・16）

ユダヤ国家は、ひとつの囲いでした。教会は、群れです。ヨハネ10・16で主イエスは言われました。

「わたしにはまた、この囲い（イスラエル）に属さないほかの羊があります。わたしはそれをも導かなければなりません。彼らはわたしの声に聞き従い、一つの群れ、ひとりの牧者となるのです」。この「群れ」という言葉は、良い羊飼いの愛と優しさに満ちた配慮のもとで、その声を聞いて、彼に従いつつ共に生活しているキリスト者を連想させます（ヨハネ10・3・4）。



2 神の畑（1コリント3・9）

教会は、神がご自身の栄光のために農作物を栽培しようとしておられる畑です。それに関して連想されるのが、実を結ぶということです。

3 神の建物（1コリント3・9）

この表現は、神が建設計画を推し進めておられることを描写しています。神は、教会に生ける石を加えています（1ペテロ2・5）。神が極めて大きな関心を持っておられる建設事業に、私たちが生涯をささげることがなんと重要なことでしょうか。

4 神の神殿（1コリント3・16）

「神殿」という言葉は、すぐに礼拝を連想させ、神が今日受ける唯一の礼拝は、教会のメンバーになっている人々からであるということを思い起こさせます。

5 キリストのからだ（エペソ1・22-23）

からだは、人が自分を表現する器です。したがって、キリストのからだは、主が、今の時代、ご自身をこの世にあらわすために選ばれたものです。いったんこの偉大な真理を把握したなら、信者は必ず教会を重要なものと考えましょうし、キリストのからだを最優先に自分自身を全面的にささげるでしょう。

6 新しい人（エペソ2・15）

ここでは、新しい創造が重要です。人間の間に存在する最も大きな相違、つまり、ユダヤ人と異邦人という違いが教会においては取り除かれ、神は、これら二つ異質の人々からひとりの新しい人をお造りになるのです。

7 神の御住まい（エペソ2・22）

この表現は、神が、今は旧約時代のように物質的な幕屋や神殿ではなく、教会に住んでおられるという真理を伝えています。

8 キリストの花嫁（エペソ5・25、27、IIコリント11・2）

教会をこのように見ることによって、愛情というものが際立ちます。「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。キリストがささげたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです」。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたのなら、当然のことながら教会は、花嫁としてキリストへの愛情で満たされているはずです。

9 神の家（1テモテ3・15）

家（あるいは家庭）で大切なのは、秩序と規律が守られることです。秩序に関しては、1テモテ3・15で示唆されています。「神の家でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです」。規律に関しては、1ペテロ4・17で示唆されています。「さばきが神の家から始まる時が来ているからです」。

10 真理の柱また土台（1テモテ3・15）

柱は、建物を支えるものであることに加えて、古代においては告示文書を掲示するために使われました。それは、公表のための手段でした。「土台」という言葉は、<sup>とりで</sup>磐、あるいは、支えを意味します。したがって、神の教会は、神がご自身の真理を布告し、支え、防御するために定めたものです。ですから、もし信者が神のみこころと目的に添う者であろうとするなら、教会の拡大と霊的繁栄のために最大限に力を尽くすべきである、といつて間違いないでしょう。

教会の使命

今日、自分の使命は福音を語ることにありと誇り、地域教会とはかかわりを持つとしない人々がいます。そういう人々は、使徒パウロの働きは二つの部分から成り立っていたことに気づく必要があります。

1 「キリストの測りがたい富を異邦人に宣べ伝え」ること（エペソ3・8）。

2 「神のうちに世々隠されていた奥義の実現が何であるかを、明らかにする」こと（エペソ3・9）。

つまり、教会に関する偉大な真理に、人々が基礎を置くように働きかけることです。

### 教会の起源

教会が始まった時期に関しては、偉大で敬虔な信者の間でも大幅に異なった見解があります。多くの人々は、教会は、旧約聖書におけるイスラエルの延長、あるいは、その副産物だと考えます。他の人々は、教会は旧約聖書においては存在せず、新しい時代に始まったと断言します。後者の見解を支持する3つの考察を挙げます。

1 エペソ3・4・5で、パウロは教会のことを奥義と呼んでいます。「この奥義は、今は、御霊によつて、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした」。さらに9節では、教会が、「万物を創造した神のうちに世々隠されていた奥義」であると述べています（コロサイ1・26、ローマ16・25・26も参照）。したがって、教会は、旧約時代には神によつて隠され、新約時代の使徒たちと預言者たちが現れるまで啓示されなかつた秘密だったのである。

2 マタイ16・18で主イエスは、「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます(will build)」と言われました。言い換えれば、主がそのことを語られた時、教会はまだ将来のものであったということです。

3 エペソ4・8・11でパウロは、教会に賜物を分け与えたのは、復活され、昇天されたキリストであつたことを強調しています。ということは、もし教会がキリストの昇天前に存在していたなら、その教会には、教え導くための賜物が与えられていなかったこととなります。

以上のことから、私たちは教会が新しい時代、もつと具体的に言うところ、五旬節(ペンテコステ)の日が始まつたことを示すことができると確信しています。

キリストのからだなる教会は、聖霊のバプテスマによつて形成されたとあります(1コリント12・13)。それでは、聖霊のバプテスマが行われた時期を確定することはできるでしょうか。使徒の働き1・5で、主は昇天される直前、使徒たちに、「もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受ける」と約束されました。五旬節の日に、彼らは、「みな聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話しだし」ました(使徒2・4)。使徒の働き5・11にたどりつくころには、教会は確実に存在しています。なぜなら、「教会全体…に、非常な恐れが生じた」とあるからです。

このことは、教会の誕生が、ペンテコステの時であつたことを示しているようです。

## 第9章 神によって定められた(2) 聖餐式と祈り会

### 聖餐式(せいさんしき) 主の晩餐(ばんさん) (パン裂き礼拝)

この厳粛な記念の行為は、主イエスが裏切られたその夜に、主ご自身によって制定されました。弟子たちと最後の過越(すきこし)の祭りを祝われた直後に、主は、私たちが聖餐式(せいさんしき)(主の晩餐(ばんさん))と呼んでいることを導入されたのです。「∴パンを取り、感謝をささげてから、裂いて、弟子たちに与えて言われた。『これは、あなたがたのために与える、わたしのからだです。わたしを覚えてこれを行いなさい。』食事の後、杯も同じようにして言われた。『この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です』。(ルカ22・19・20)

#### 1 この祝祭を守る意味

この儀式の重要性に関しては、いくつかの事実が提示されています。

・それは記念の出来事です。救い主は、「わたしを覚えてこれを行いなさい」と言われました。それは、主の苦しみと死、主がみからだをささげ、血を流されたことを覚える時なのです。それは、その儀式にあずかる者たちが、ゴルゴタの主の十字架とそれに関連する一連の事柄を思い巡らす時なのです。

・ 礼拝と賛美とをもって神に応答することなく、主イエスの受難を覚えることはまったく不可能なのです。このように、**聖餐式**は、公の礼拝の時であり、神ご自身の全てと神が成してくださった全てのことゆえに、神を崇める時なのです。

・ **聖餐式**は、キリストのみからなる教会がひとつであることの公のあかしです。一つのパンは、すべての真のキリスト者から成るキリストのみからだの象徴です。そのパンにあずかることによって信者は、自分が神の全ての真の子どもたちとひとつであることを証言するのです。杯を飲むことによって、自分が主の尊い血によって聖められたすべての人々とひとつであることを認めるのです（I コリント 10・16・17）。

・ **聖餐式**は、ご自身のこの記念を自ら定められたお方が、再び来られるということに覚えるためのもので、「ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです」（I コリント 11・26）。

このように、礼拝者は、ゴルゴタを振り返って主をその死において覚えるだけではなく、神の御座を見上げて成し遂げられた贖いのゆえに、神を賛美するだけでもありません。主が、天より下つて来られて、ご自身を待ち望んでいる人々を連れ帰つてくださるその瞬間をも期待しているのです。

## 2 この祝祭を守る回数

聖餐せいぐんを守る時と回数については、聖書は律法のような形では命じていませんが、恵みの声をもって願っているのです。使徒の働き20・7には、次のように書かれています。「週の初めの日に、私たちはパンを裂くために集まった」。週の初めの日とは、現在の日曜日のことです。それは、主の復活の日であり、主の民が礼拝と記念のために集まるのに適した日です。私たちに与えられている指示は、「…このパンを食べ、この杯を飲むたびに…」というものです(1コリント11・26)。誰でも、聖餐せいぐんは毎週、あるいは毎月、あるいは三ヶ月に一回守らなければならないと決めてしまうなら、その人は聖書の語っていることの範囲を超えてしまっているのです。とはいえ初期の弟子たちが、主を覚えるために毎週集った可能性は非常に高いのです。

C・H・スポルジンは、聖餐せいぐんを毎週守ることを強く主張しました。「私たちのうちのある人々がしているように、毎週主の食卓に集うことによって、パン裂きの重要性が失われるとは思わず、それは、私たちにとって常に新鮮である、というのが私のあかしで、私は、現在の神の民の多くの人々の思いを言い表していると思うのである。パン裂きを行うには、説教のテーマが何であつたにせよ、すなわち、シナイ山の雷が私たちの頭上で鳴り響こうが、あるいは、ゴルゴタの哀調を帯びた響きが私たちの心に深い感動を与えようが、等しく適切であることを私は主の日の夕べにしばしば思ったのである。聖餐せいぐんを月に一度しか行わず、また、交わりのために共に集まりパンを裂き、主が来られるまでその死を告げ知らせるこの栄光を奪うことによって、週の初めの日を傷つけるクリスチャンの教会は恥を知りなさい。



主日ごとに聖餐を祝うことの麗しさをひとたび知った者は、その回数を少なくすることに満足できないと私は確信するのである。」(「旧約聖書の宝庫」より)

「ジョン・エドワーズも週ごとに主を覚えることを支持しました。「初期のキリスト者が、その愛する贖い主の受難の記念を主日ごとに祝う習慣があったことは、聖書から見て明らかだと思われるので、遠からずキリスト教会において、再びそうなるものと私は信じている。」(「リバイバル者」より)

### 3 どういう人がこの祝祭にあずかれるか

聖餐にあずかれるのはキリスト者だけであることは、あえて言う必要はないでしょう。贖われた者たちだけがその資格をもち、その神聖な意味を味わうことができます。キリスト者は、自分自身で自分を吟味した上で、パンと杯にあずかる必要があります(「Iコリント11・28」)。罪は告白して捨て去り、そして、パンと杯にふさわしい方法であずかなければなりません。自分を吟味することなく聖餐にあずかる者はすべて、主によって懲らしめられる危険にさらされています(Iコリント11・27、29・32)。

真に主を覚えることなく、パンを食べ、杯を飲むことは可能であるということをお忘れないうにすることが重要です。象徴として行っていることに私たちの心が応えないなら、この聖餐を単なる儀式に引き下げてしまうことがあり得るのです。「わたしを覚えなさい」という主のみことばに真に従うなら、私たちの生活は、神との交わりのうちになければなりません。

## 祈り会

地域教会の様々な集まりについては、新約聖書のうちにあまり多くの指示が与えられているわけでは  
ありません。キリスト者が、交わりと祈り、みことばの学びとパンを裂くために集まったことは知って  
いますが(使徒2・42)、それ以上のことははっきり示されていません。伝道の働きは、未信者に届く所  
ならどこでも、それぞれのキリスト者によって教会外でなされたようです。しかし、常にその目的は、  
救いを受けた人々を地域教会の交わりに加えることでした。

初期の教会のすべての集まりの中で、祈り会より目立っていたものはなかったでしょう。実際、教会  
は祈り会の結果として生まれたのでした(使徒1・14)。そして、それ以来キリスト者はひたすら祈りの  
うちに堅く立ち続けました(使徒2・42)。実は、教会史全体が祈りに応えて下さる神の真実に対する賛  
辞なのです。

## 1 特別な約束

共同の祈りは、神が良しとしておられるだけでなく、主ご自身のご臨在という特別な約束を伴うも  
のであるということをお私たちは常に覚える必要があります。マタイ18・19・20に、「まことに、あなたが  
たにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈  
るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名  
において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」とあります。これ以上に明確に語ることはで

きないでしよう。ここに、破られることの無い二重の約束があります。第一に、ふたりの信者が、神に願うことにおいて一致しているなら、その願いは応えられます。第二に、キリスト者が主イエスの名によって集まる時、主は彼らのただ中にいてくださるのです。困ったことに、私たちはそれを信じていないのです。もし、信じているなら、私たちの祈り会は満たされ、私たちの教会は、神のために燃えていることでしょう。

## 2 グループとしてどう祈るのが良いか

共同の祈りという主題を考えるにあたって、はじめに、それに関連する基本的な事柄をいくつか提示しましょう。

・ 第一に、祈り会では、一人ずつ祈ります。他の人たちは黙っています。実際は全員が祈っているのです。声を出して祈っている人は、そのグループの祈りを表現しているのです。他の人たちは、その人の祈りに心を合わせて、その祈りを自分たちの祈りとするのです。多くの場合、彼らは、「アーメン」と言うことによって霊の一体性を表明するのです。

・ 「祈りを唱えること」と「祈ること」との間には、大きな違いがあることにも触れておきましょう。この区別をはつきりと歌った子どもたちの賛美歌があります。

よくお祈りの言葉を言うけれど、本当に祈ったことがあるかな  
心で願っていることは、言っている言葉のとおりかな

ひざまずいて石で作った神に祈るように、  
生きておられる神様に、言葉だけのお祈りをささげている

心からでない言葉を、主は決して聞かれません  
口先だけのお祈りに、主は関心を示されません

(J・パートン作詞「祈ったことがあるかな」より)

心の伴わない、ただ繰り返されるだけの祈りほど、祈り会を即座に生命のないものになってしまうものはありません。あまりにもしばしば、私たちは空虚な祈願を並べ、その祈りは天井から跳ね返ってくるのです。回心して間もない人の祈りは、通常自然発生的で新鮮ですのでさわやかです。しかし、長年のキリスト者は、しばしば神にも人にも役に立たない祈りのパターンに陥ってしまふのです。「祈りが義務感だけからささげられる集まりは、閉鎖する必要がある」(E・G・フィスク「サボテン」より)とはよく言ったものです。

・避けるべき、もう一つの危険は長い祈りです。聖書が、「絶えず祈りなさい」(1テサロニケ5・17)といているのは事実ですが、それは一人で祈り会の時間を独占することに許可を与えているのではないのです。それぞれの祈りが短く、そして、多くの人が祈りに加わるなら、関心は増すのです。

・私たちの願いは、具体的であるべきです。「神様、世界中で多くの魂を救ってください」と祈るよりも、「主よ、私の弟の二郎を救ってください」と祈る方が良いのです。そして、二郎が救われたなら、あなたは自分の祈りが応えられたことを知って、他の人々のためにもその名前を挙げて祈るよう励まされるでしょう。

### 3 具体的でありなさい

こうした祈り会は、退屈ではありません。私たちが、恵みの御座へと携えて行くことのできる具体的な願いがたくさんあります。ここに、いくつか挙げてみましょう。

・ 私たちの上に立つ権威ある人々のために、その名前を挙げて祈ってください。彼らが救われて、「私たちが敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごす」ことができるように祈るのです(1テモテ2・2)。

・ あなたの教会の病氣の人々のために祈ってください。主は、それが誰であるかを知っておられますが、知らない人もいるかもしれませんので名前を挙げてください。

- ・ 救われていない親族や友人のために祈ってください。私たちは祈り会の場で、自分の愛する者たちの名前が挙げられることを決して恥ずかしいと思う必要はありません。もし彼らが救われることを本当に願っているなら、教会の祈りの援助を歓迎するでしょう。
- ・ 教会の長老たちのために祈ってください。彼らは、知恵と忍耐が要求される重要な責任を負っているのです。彼らは、あなたのとりなしの祈りに加えていただくに値します。
- ・ あなたの教会から派遣された宣教師のために祈ってください。もし、あなたが時々彼らと連絡を取り合っているなら、彼らがどのような問題に直面し、どのような必要を抱えているかがわかるでしょう。
- ・ 日曜学校のため、教師たちのため、そして、神のみことばを聞いている少年少女のために祈ってください。
- ・ 貧しい人々のために祈ってください。もし、祈り会に出席している誰かを当惑させるなら、その場合は、名前を挙げない方が良くかもしれません。
- ・ あなたの教会の危険と誘惑と試練に直面している人々のために祈ってください。
- ・ 伝道者や教師のように、主の働きに携わっている人々のために祈ってください。
- ・ あなたの祈りに必ず感謝を含めるようにしてください。このことは、ピリピ4・6において力強く示されています。「何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもつてささげる祈りと願いによつ

て、あなたがたの願い事を神に知っていたいただきなさい」。主は当然のこととして、ご自分の民が感謝することを期待しておられます。主の恵みの全てに対して感謝をしないのは罪です。

#### 4 重要な条件

私たちの祈りに応えていただくためには、守らなければならない条件があるのでないでしょうか。

・ 第一に、私たちはキリストに留まらなければなりません。「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。」(ヨハネ15・7)。キリストに留まるとは、主の戒めを守り、主のみこころを行い、主のみことばに従うことです。

・ 第二に、私たちの祈りは主のみこころと調和するものでなければなりません。「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です」(1ヨハネ5・14)。神のみこころの概要は聖書に記されていますので、私たちの願いは聖書の教えに沿うものである必要があります。

・ 第三に、主イエス・キリストの御名によって、私たちの願いがささげられなければなりません。「またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです」(ヨハネ14・13)。「あなたがたが父に求めることは何でも、父は、わたしの名によってそれをあなたがたにお与えになります」(ヨハネ16・23)。私たちが真に主

の御名によって願い求めるなら、それは、主が神に対してその願いをしておられるのと同じなので  
す。

・最後に、私たちの動機は純粹でなければなりません。ヤコブは、「願っても受けられないのは、自分の快楽のために使おうとして、悪い動機で願うからです」と、私たちに注意を呼びかけています(ヤコブ4・3)。もし、私たちの動機が利己的で罪深いものであるなら、応えを期待することはできないのです。

##### 5 覚えておくの良い、いくつかのこと

私たちの祈り会が、「教会の原動力」であることを願うなら、この章を閉じる前に、さらに、いくつかのすべきことと、してはならないことを確認しておきましょう。

- ・たとえば、見られるための祈りをしないでください。ご存じのように、偽善者たちは人に見られるために会堂や通りの四つ角に立つて祈るのが好きなのです(マタイ6・5)。
- ・神に、自分でできるようなことを頼まないでください。たとえば、私たちは、神にまだ救われていない人々を伝道集会へ導いてくださるよう頼みます。神は、私たちがその人々を招くために自分の口を用いること、また、その人々を連れて来るために自分たちの車を使うことを期待しておられるのではないでしょうか。



・ 自分はそれを持つべきではないということを知っているものを願い求めないように注意してください。神は、時々そのような願いをかなえてくださいますが、それは魂をやせ衰えさせます(詩篇106・15)。

・ 祈りへの応えが、すぐに来なくても落胆しないでください。神の応答は、私たちが神を待ち望むこととの幸いを逃すことがないように、また、虚しく神に依り頼んだのではと心配することのないよう、早すぎることも遅すぎることも決してないのです。

・ もし、神の応えが、あなたが願った通りのものでないとしたら、次のことを忘れないでください。主は、私たちが求めるものよりも更に良いものを与える権利を持つておられるということです。私たちは、何が自分にとって最上であるかを知りませんが、主は知っておられます。ですから、私たちが願ったり考えたりする以上に与えて下さるのです(エペソ3・20参照)。

この章を閉じるにあたって強調したいことは、祈りなくして教会における真の進展はあり得ないということです。私たちは、決まりきったことを行い、それなりの成果と思われるものを産み出すことができるでしょうが、とりなしの祈りなくして、神のために何一つ成し遂げることはできないのです。もし、私たちが聖書のみことばによってこの結論に至らないなら、いずれ必要に迫られて、この結論に至ることになるのです。

## キリストは教会を愛された

---

2011年 2月 1日 初版発行

著者 ウィリアム・マクドナルド  
訳者 ステッカー・ギェンター  
印刷 株式会社ジーシステム  
発行 ゴスペルフォリオプレスジャパン  
〒156-0053 東京都世田谷区桜2-21-9  
TEL 03-3248-5898/FAX 03-3248-5898  
<http://www.gfpjapan.com>

---

©2011 Gospel Folio Press Japan Printed in Japan  
ISBN 978-4-9905543-0-9